

相模川中流域 座間の湧水～原当麻を歩く！

相模野台地や座間丘陵に沁み込んだ雨水が湧水として湧き、昭和15年に完成した磯部頭首工からの相模川左岸用水が滔々と流れる中を歩く。朝9時に座間駅に集合、中流域の自然環境や里山で活動する方々との交流、民俗資料館見学を行い、予定通り(15:40)原当麻駅で解散。

◆コース概略図◆

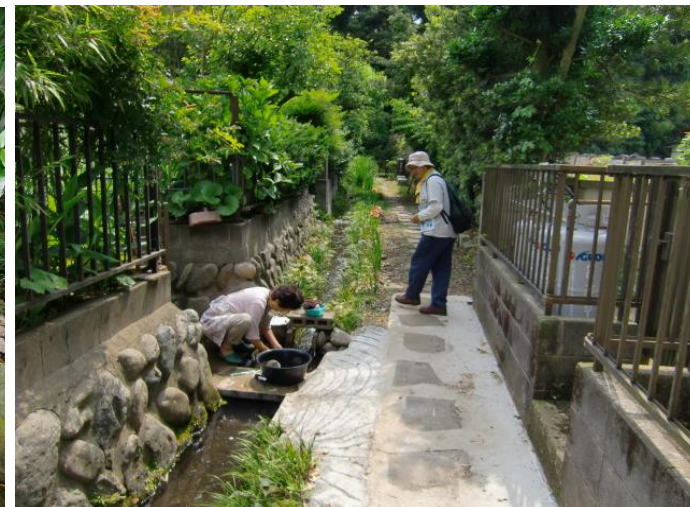


”参加者： 会 員、一般参加者、事務局 14名”

座間湧水群散策では『座間のホテルを守る会』の八木さんが「湧水ざまップ」を準備して案内。



湧水とは、崖下や谷戸の窪地などから地下水が自然に湧き出してくる現象、場所のことをいい、地下水面が地表に現れる場所です。座間の湧水は、市民・事業者・行政が一体となって保全している。



【相模の大風】

大風の歴史は、古くは天保年間(1830年)頃からといわれ、はじめは子供の誕生祝や農作祈願で揚げられ、本格的に大風となったのは明治中期。その時代を風刺した題字が描かれ時々の人々の心に残る行事となり、平成2年 国の無形民俗文化財指定(関東の大風揚げ習俗)となっている。2013年度題字【新戸会場】 彩風(さいふう)でした。他にも、友好、創造などが空を舞ったようです。

座間の「鮎の道」を相模川に向かって進むと「座間八景」風と光とやすらぎの相模川に着く。

田植えを待つ田んぼの中では子供たちが飛び跳ねて「泥んこ」になり、歓声を上げていた。

相模川堤防上を吹き抜ける風を背に遊歩道を軽やかに歓談しながら歩く。



「れんげの里あらいそ 相模の大風センター」見学しながら休憩。【題字の変遷】儲けと大当たり(明治20年)養蚕の大当たり、祝勝(明治28年)日清戦争の勝利、凱旋(明治38年)日露戦争の勝利、東日本大震災では中止と大風保存会の皆さまの時代の気分や思いが込められています。



大風センターから炎天下の中、相模線沿いを「鳩川縄文の谷戸」に向かい歩を進める

【鳩川 縄文の谷戸の会】

子どもから大人まで楽しめる野外(農)作業で思いきり汗を流して、ほおぼる おにぎりのおいしさは最高。

住宅地に囲まれた中に、小川のせせらぎ、野鳥のさえずり、かれんな野の花、ホタルや虫たちが現れる里山の原景の残るトロの森のような谷戸です。

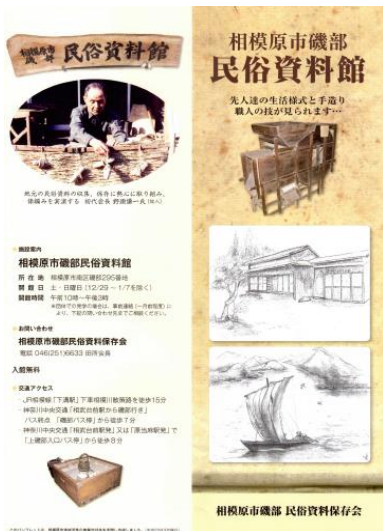
鳩川 縄文の谷戸の会代表:倉橋さん(代表幹事)が、谷戸や隣接する勝坂遺跡の説明。

会の皆さんが準備された”味噌汁・浅漬け・里芋の煮つけ・畑で採れたイチゴ”などを、全員美味しく頂きながら和やかに懇談、田んぼをバックに記念写真、後ろ髪を引かれながら後にした。



【相模原市磯部民族資料館】

初代会長の野頭謙一氏(故人)が、地域の都市化が進み、昔の生活用品や農機具など古き良き物が、捨てられて消えていく事に寂しさを感じて、収集を始めました。引き継ぐ現館長の野頭重一氏は、第1回柳島でお会いした、同じく親子2代で資料館を守る「藤間雄蔵氏」がダブって見えた。



野頭さんのユーモア溢れた口調の中に資料館に寄せる情熱を感じて、参加者全員聞き入った。
新造した帆掛け舟(2艘)の進水式(6/9)、復元「帆掛け舟」の実演:8月の第一日曜日開催



【相模川磯部頭首工】

船戸廣次氏を中心としたグループの活動によって着工され、昭和11年から昭和15年の5ケ年をかけて完成した。はじめは磯部頭首堰と言っていたが、現在は磯部頭首工と呼ばれる。頭首工：河川などから用水路へ必要な灌漑水を取り入れるための施設、一般に取水堰と取入口とから成る。（広辞苑）

・磯部民俗資料館の裏手は頭首工に溜まった水で、相模川随一の水量を誇る大河の面影。

・中央を流れる水は下流の「相模大堰」や「寒川取水堰」で県民の飲料水として取水される。

・10連の水門があり、6門が相模川左岸用水路、4門が相模川右岸用水路の取水口。



【歩行数：約23,000歩、参加者の感想】

今日は 大変貴重な ウォーキング 有難うございました。やはり 歩いてみないとわからないものがありすぎるものが 体験できました。
湧き水で 人も草木も農作物も 鳥もトンボ蛭も すべての営みの源が、何も語らない 一滴の水であることが 体験できました、 本当に有意義な 一日でした。



座間下宿付近の左岸用水路上を歩く



左の川は「八瀬川多自然川づくりの施工現場」
魚が泳ぎ、子供二人が釣り糸を垂れていた。